

第 3 回 福祉用具専門相談員実力ランキングテスト〔問題用紙〕

福祉用具

(設問数： 4 3 2 2 0 点満点)

第3回 福祉用具専門相談員実力ランキングテスト〔問題用紙〕

福祉用具

(設問数：43 220点満点)

1. ベッド関連

【設問1】 ベッドの構造－1

ベッドの構造に関する次の記述に関して、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。)

- ① 一般的に表現される「3モータのベッド」とは、背上げ、膝上げ、全体の昇降を独立して操作できるベッドをいうが、必ずしも3個のモータで駆動されるとは限らない。
- ② 一般的に表現される「3モータのベッド」の中には、背上げ・膝上げが一定のパターンで同時にあるいは協調的に駆動できるものがある。
- ③ 一般的に表現される「背上げ・膝上げ連動タイプのベッド」とは、ひとつのモータによって背上げと膝上げが連動して駆動されるものであり、必要に応じて背上げだけを駆動できるように設定できることが多い。
- ④ 全体を昇降させると、ベッド全体が鉛直に移動するタイプと、円弧軌跡を描くタイプがある。国産のベッドだけで見てみると、鉛直昇降するタイプの方が床面の最低高さを低くできる。
- ⑤ ベッドの膝上げ機構には、1) 膝だけが持ち上げられるタイプ、2) 下腿部がほぼ床面に平行に持ち上げられるタイプ、3) 膝が上がるとともに、足部が床面より下がるタイプなどがある。足部が鬱血しているような場合には、足部が床面より下がるタイプを利用すると鬱血の予防・治療に役立つ。

【設問2】 ベッドの構造－2

ベッドの構造に関する次の記述に関して、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① ベッドのボトム（底板）の構造には、1) 鋼線を溶接した編み目構造、2) プラスティック成形の構造、3) 鋼板に穴をあけた構造 などがある。鋼線を溶接したタイプは通気性がよく、高温多湿な我が国の気候風土を考慮したものである。
- ② ボトム（底板）はベッドメーカーによって構造が異なり、体幹部（背ボトム）、臀部（腰ボトム）、大腿部（膝ボトム）、下腿部（脚ボトム）の4分割されている形状が多い。これらのボトムの中間に伸縮する構造部材を利用したものや、ボトムの部分ごとに鋼線編み目ボトム、プラスチック成形ボトムを混ぜた機種が市販されている。
- ③ サイドレールの役割は、布団や身体の落下防止、ベッド上での動作の支援が主たる目的である。差し込んだだけで利用するサイドレールは、足側に差し込んで布団や身体の落下防止に利用したり、中間に差し込んでオーバーテーブルを支持したり、頭側に差し込んで寝返りの時の手がかりに利用できたり、役割を簡単に変更できるので便利である。
- ④ 差し込んで利用するサイドレールはベッド背上げ時に腕を挟み込んだまま背上げをしても、力が加わると自然に抜けてくれるので、安全である。
- ⑤ 端座位の安定や立ち上がりの補助などに利用するベッド用グリップ（介助バーなどと呼称される）は、利き手側に設置することが一般的である。右利きの人で、ベッドの左側から出る人は端座位の維持や立ち上がりの補助に利用する場合には足側に設置する。

【設問3】 ベッドの適合－1

ベッドの適合に関する次の記述に関して、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（各1点）

- ① ベッドの幅（マットレスの幅）は、介護度が高い人ほど狭めのものを選択する。
- ② ベッド上で種々の介助動作が必要な人の場合には、介助者の腰痛防止などの視点からベッドの幅は狭い方がよい。
- ③ ベッドのサイドレール（柵）を利用して寝返り・起き上がりをし、ベッドの高さを利用して立ち上がることができる人の場合には、マットレスの幅は広い方がよい。
- ④ ベッドの背上げ座位で一定時間過ごすようなケアプランの人の場合には、ベッドの背を上げたときに利用者の骨盤が、どの程度ベッドの背上げの角度に追従するかを確認することは大切な要因のひとつである。
- ⑤ 各メーカーでショートサイズあるいはミニサイズなどの名称で市販されているベッドは全体の長さが短くなるだけでなく、大腿部（膝ボトム）が短くなっているものが多い。

【設問 4】 ベッドの適合－2

ベッドの幅や長さを決めるための直接的な要因として考慮すべき項目に○，考慮しても意味がない項目に×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点，1問でも間違えると0点。）

- ① 本人の身長，体格.
- ② 寝返り・起き上がり動作のしかた.
- ③ 介助者の身長などの体格.
- ④ 部屋の大きさ，間取り.
- ⑤ 動線と部屋の出入り口の位置.
- ⑥ ベッド周辺で利用する福祉用具．（車いす，ポータブルトイレなど）

【設問 5】 起き上がり・立ち上がり動作

ベッド上での動作に関する次の記述で，正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（各1点）

- ① 側臥位になったり，寝返りをする場合には原則としてサイドレール（柵）を遠い側の手で握って寝返る．したがって，片まひの人の場合には，まひしている側に寝返ることが容易であり，起き上がりの時はこのような動作をする．
- ② 起き上がりにくくなってきた人に起き上がり方を教える場合には，側臥位になってから起き上がるように勧める．このときに側臥位になった側の肘と掌でベッド面を押しながら起き上がると起き上がりやすい．また，頭を少し後ろに倒し気味にするとさらに起き上がりやすくなる．
- ③ ベッドの背上げ機能を利用して起き上がる場合には，仰臥位のままベッドの背を上げ，側臥位になりながら起き上がる場合と，側臥位になってからベッドの背を上げる方法がある．筋力だけを考えると，一般的に側臥位になってから背を上げる方が容易に起きあがれる．
- ④ ベッドの背上げ機能を利用して仰臥位から起き上がる場合に，まずベッドの膝を上げ，ついで背を上げ，最後にベッドの膝を下げて端座位になると容易に起き上がることができる．このような一連の動作をひとつのスイッチを押すだけで実行するベッドが市販されている．
- ⑤ 立ち上がって歩ける人の場合，ベッドから出るときの最適なベッドの高さとベッドに戻るときの最適なベッドの高さは一般的に同じである．したがって，ベッドから出るために調節したベッドの高さは戻るまでそのままにしておくとう便利である．

【設問6】 使い方ー1

ベッドの使い方に関する次の記述で、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 身体を自分で動かすことができない人の場合、ベッドの背上げ姿勢をとるためには背だけを上げると身体が足側に滑ってしまう。したがって、背上げ姿勢をとるときには背上げと膝上げを同時に操作するとよいが、二つのスイッチを同時に押すことが難しいければ、背上げ・膝上げ連動タイプのベッドを選ぶとよい。
- ② ベッドの背を上げたり、下げたりすると、身体とマットレスの間にずれが生じる。このずれをとるために、身体を自分で動かせない利用者の場合には、背を上げたときには「背抜き」といわれる体幹を動かす介助をしなければならず、ベッドを下げたときには側臥位をとってずれを除去しなければならない。
- ③ ベッドの背を上げると、身体が足側にずれる。これを防止するために膝を上げて身体の足側へのずれを防止するが、この際、背を上げるにつれて、利用者の腹部や胸部に圧迫感を生じる。これはベッドの背上げ機構を工夫することによってなくすることが可能であり、最近のベッドは皆このような圧迫感をなくしている。したがって、俗に言われる「背抜き」介助は新 JIS 対応の新しく開発・市販されているベッドでは不要であり、背中へのずれをとるためだけに背抜き介助は行われる。
- ④ ベッドの背を上げる前にまずしなければならないことがある。それは利用者の寝ている位置を確認することである。腹部や胸部の圧迫を軽減し、身体とマットレスの間のずれを少なくするために、中央より若干（3～5cm 程度）足よりに位置をずらせてから背を上げた方がよい。
- ⑤ この背上げするときの正しい位置は人によって、またベッドによって異なる。したがって、ベッドを導入するときには、一人一人に対して、正確な寝位置を教える必要があるが、大転子の位置をどこにするか教えるのがもっとも正確であり、簡易である。

【設問 7】 使い方ー 2

ベッドの使い方に関する次の記述で、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 背上げた状態からベッドの背を下げる場合には、個人差はあるが、一気に平らまで戻すことはしない方がよい場合が多い、完全に平らにしないで、10～15 度程度背を上げた位置でいったん止め、しばらく時間をおいてから下げるとよい。
- ② ベッドの背上げ姿勢を作るには、まず膝を上げ、ついで背を上げる。必要な背上げ角度になったら、膝を少し下げる。背が上がっている状態から背を下げるときはまず足を平らまで下ろしてから背を少しずつ下ろす。
- ③ 認知機能に障害がない人で、スイッチを自分で操作したいという。片手にスイッチを持って操作することができない。取扱説明書に書かれているとおり、ベッドのサイドレールにスイッチをかけて、使うように勧めた。ただし、背上げ角度は 20～30 度程度であった。
- ④ ベッドの背上げ機能を利用しても自分では起き上がれないひとがいる。体格が大きく、介助者は小柄で非力である。使用しているベッドは背上げ・膝上げ連動タイプのベッドである。ベッドの交換はしたくないというので、膝を上げないように連動を解除して、背上げだけで起き上がり介助する方法を教えた。
- ⑤ ひとつのスイッチを押すと、まず膝が上がり、ついで背が上がりはじめ、ある程度背が上がると、今度は膝が下がりて腹部の圧迫感を小さくするというベッドがある。ケアプラン上、背をいっぱい上げた姿勢を 30 分ほど維持しなければならないことがあるので、このときにはこの一連の動作をとらないようにして使用するよう勧めた。すなわち、ごく単純に、まず膝を上げて、それから背を上げて、必要な姿勢を作るようにした。

【設問8】 マットレス

マットレスに関する次の記述で、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 標準的な繊維系のマットレスを利用している人が寒いという。背上げをよく使うが、必ず膝を上げてから背を上げるというので、マットレスの上に布団を敷くようアドバイスした。
- ② リバーシブルのマットレス（片面が比較的柔らかめで反対側が堅めのマットレス）の柔らかい側を利用しているが、自分で寝返りや起き上がりがなんとかできる人がいる。しかし、寝心地が悪いという。褥瘡対応の軟らかいウレタン製のマットレスを勧めた。
- ③ 今まで繊維系のマットレスを利用してきた人が、一時的に身体機能が衰え、寝返りなどがしにくくなって、床ずれの心配が出てきた。体位交換を頻繁に行うなどの介助体制が整うので、ウレタン系の柔らかめのマットレスに変更した。
- ④ 低反発ウレタン製のオーバーレイを繊維系マットレスの上に敷いて利用している人が、ベッドの背を上げたときに姿勢が悪くなって困ると言ってきた。褥瘡のリスクは少なく、オーバーレイは寝心地だけで利用しているようなので、マットレス全体を変更し、少し柔らかめの1枚のマットレスに変更するように勧めた。
- ⑤ 臥位では少し柔らかめなマットレスが欲しいが、立ち上がるために、端座位をとったとき座位を安定させたいという。マットレスの端の部分が少し堅めになっているマットレスがあるので、これを勧めた。

【設問9】 テーブルなどベッド付属品

ベッド付属品に関する次の記述で、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 自分で食事をするとは何とかできるのだが、座位は不安定である。移乗の資源が不足していることから朝食だけはベッドでしたい。端座位保持テーブルを利用することを勧めた。
- ② ベッド上背上げ座位で食事をするという。自分で食具を持つことができ、食物をすくって口まで運ぶことも条件が整えばできるという。サイドレールに渡すテーブルが安価なのでこれを勧めた。
- ③ ベッドの背上げ座位でテレビを見たいという。テレビが36インチで、遠くになると見えないと言うので、ベッド下に脚部が入るコの字型のベッドサイドテーブルを勧めた。
- ④ 家族と一緒に食事をしたいが、車いすのため、適切なテーブル高さが家族と一致しない。車いす座面の方が食卓用いすの座面より高いことが原因だが、テーブルを高くすると家族が使いにくい。コの字型のベッドサイドテーブル（オーバーテーブル）を勧めた。
- ⑤ 介護ベッドではない普通のベッドを利用して、寝返り・立ち上がりの補助に手すりが欲しいという。置き型で床から立ち上げる手すりを紹介したが、ベッドが介護ベッドではないので、介護保険は利用できない。

2. 床ずれ防止関連

【設問10】 原因

褥瘡を作る原因として正しい記述に○，間違っている記述に×をそれぞれ選びなさい。
(すべて正解して5点，1問でも間違えると0点.)

- ① 褥瘡を作る原因には圧迫（圧力）とともに，ずれ力もあるが，圧力は比較的簡易に計測できるが，ずれ力の計測は難しい。
- ② 圧力がその部分の毛細血管圧より高くなれば，直ちに褥瘡は形成される。
- ③ 高齢者の皮膚は化学的な浸食に対しても弱い。したがって，便失禁の放置なども褥瘡を作る要因のひとつである。
- ④ 車いす上で座骨が前に滑った姿勢，いわゆるずっこけ姿勢で座っていると，座骨部に褥瘡を作りやすくなる。したがって，褥瘡を作りやすい人の場合には，車いす上での座位姿勢に注意が必要である。
- ⑤ 圧力は荷重を接触面積で除したものである。したがって，臥位姿勢と比較して，座位姿勢の方が接触圧は高くなりやすい。褥瘡を形成しやすい人や車いす座位時間が長くなる人にとっては，車いすのクッションにはベッドのマットレス以上の圧分散機能が要求される。
- ⑥ ベッドの背上げを繰り返していたら，肩甲骨部に褥瘡を作った。ひとつの原因に，背上げをする前の寝ていた位置が悪かったことが考えられる。

【設問11】 ケア

褥瘡を形成したあとのケアに関する次の記述の内，正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 仙骨部に褥瘡を作ったら，何はともあれひとまずエアマットレスを導入すべきである。
- ② かかとに褥瘡を作った。小さな円座を褥瘡部分を免荷するように，かかとの下に当てた。
- ③ 車いす座位時間が長い人が座骨部に褥瘡を作った。車いすクッションを低反発ウレタン系からエアセルタイプに変更することを勧めた。
- ④ 一時的に体調を崩し、臥位時間が長くなって仙骨部に褥瘡を作ってしまった。今までトランスファーボードによる座位移乗を行っていたが，立位で介助移乗するよう勧めた。
- ⑤ 臥床時の圧力に起因して仙骨部に褥瘡を作ってしまったので，マットレスをエアマットレスに変更するとともに，車いす座位時間を短くするように勧めた。

【設問 1 2】 予防・用具の選択

褥瘡の予防・用具の選択に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選べなさい。(各 1 点)

- ① 寝返りや起き上がりがベッドの機能を利用すれば自分ででき、褥瘡のリスクが低いと考えられる人の家族が、褥瘡を心配してエアマットレスにして欲しいという。体位変換などを頻繁に行う自信がないようなのでエアマットレスを勧めた。
- ② 褥瘡を作りやすい人がある。ケアプラン上マットレスでの対応が求められている。エアマットレスの空気が入れ替わる方式が気持ち悪いというので、圧の分散機能が高い静止型のマットレスを導入することにした。
- ③ 繊維系マットレスの上に低反発ウレタンのオーバーレイ（上敷）を使用している人が、蒸れていやだという。静止型の褥瘡対応マットレス（リプレイスメントタイプ：1 枚のマットレスで対応できるタイプ）を勧めた。
- ④ リプレイスメントタイプのエアマットレスを利用している人がある。マットレス上で身体が足側にずれやすく、ベッドの背を上げるときに身体を頭側に移動させる介助が大変だという。スライディングシートを利用すれば容易なのだが、エアマットレス上ではやりにくいと言う。エアマットレスの緊急解放バルブを抜けばマットレスの空気がすぐに抜けてスライディングシートが使いやすくなることを教えた。
- ⑤ 骨突出や栄養不足で褥瘡のリスクが高い人がある。厚いケアでこれまで褥瘡を作らないで過ごしてきたが、主たる介護者の入院によって、ついつい仙骨部に褥瘡を作ってしまった。これまではリバーシブルタイプのマットレスを利用し、軟らかい側で寝ていた。初期で、軽度であったので、厚さ 50mm のエアマットレスを勧めた。

3. 車いす関連

【設問 1 3】 選択

車いすの選択に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。)

- ① 77歳の脳血管障害の男性で、立って歩けるが、長い距離は歩けない。74歳の小柄な妻が介助で使用するそうだが、外出時(散歩や近所の買い物)の車いすを求められた。移動経路を調べたら、10cm程度以下の段差が何カ所もあったが、階段のような大きな段差はなく、急な坂道もなかった。座位姿勢の崩れもないので、標準型の介助用車いすとウレタンのクッションを勧めた。
- ② 身長150cmの女性が屋内で両手両足こぎをするという。前座高42cmで後輪22インチの車いすと、厚さ5cmのウレタンクッションを勧めた。
- ③ 身長165cmの女性で、介助用の車いすが欲しいという。骨盤が後傾し、円背になっており、移乗はリフトだというので、シート角度を調節できる車いすでシート角度を最大に設定するように勧めた。バックサポート角度はシート角度が調節できれば調節する必要はないので、バックサポート角度は固定されているタイプにした。
- ④ シート角度やバックサポート角度が調節できる車いすで調節してみたが、体幹が傾いてしまう。姿勢調節機能付き車いすを勧めた。
- ⑤ 片手片足で車いすを駆動するという。屋内だけで使用することとで、上手に利用できる。低床型で足が床に着き、座面角度がほぼ平らな車いすで、バックサポートが調節できない車いすを選択した。

【設問 1 4】 計測

車いすの大きさなどの定義に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 左右のサイドガードの内側から内側を計測したら、400mmだった。この車いすを座幅400mmの車いすという。
- ② 左右のシートパイプの外側から外側を測定したら、400mmだった。この車いすを座幅400mmの車いすという。
- ③ シートの奥行きとは、シートの前端からバックサポートパイプの前端までの距離を言う。
- ④ シート角度とはシートパイプあるいはシート前端と後端を結ぶ線が水平面となす角度を言うが、便宜上シート前端高と後端高の差で表現することもある。
- ⑤ キャンバー角とは後輪を正面から見たときの鉛直からの傾きを言う。

【設問 15】 適合

車いすの適合に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 両手こぎをする女性の骨盤の幅を計測したら、衣類の上からで 350mm だった。屋内使用するというので座幅 375mm の車いすを選んだ。
- ② 片手片足こぎをする人の車いすで、前座高を足がしっかり着地する高さにした上で、前座高と後座高の差を一般的な 20 ～ 30mm より若干大きくするように後座高を下げ、差を 40mm に調節した。
- ③ 四肢まひで介助移動する女性で、骨盤が後傾し、円背になっている。これらは矯正できない。シート角度を少し大きめにし、バックサポート角度をこの車いす最大の約 100 度に設定した。
- ④ 脳血管障害で四肢まひの男性を標準型の車いすに座らせたら、シート角度やバックサポート角度を調節しても、体幹が左右に傾く。理学療法士に確認したら、傾く原因は体幹起立筋の筋力不足に起因しているという。姿勢調節機能付き車いすを使用するように勧めた。
- ⑤ 足関節に可動域制限があり、背屈制限がある。足を車いすのフットプレートに乗せたらつま先部分がプレートに乗るだけで、安定しない。ふくらはぎを支えるレッグサポートベルトをつけたがそれでも不安定なので、本人や家族などに了承をいただいて簡単なベルトで足を固定するようにした。

【設問 16】 移乗

車いすの移乗に関連した次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（各1点）

- ① 立位で自立移乗する人なので、立ち上がりやすいように、アームサポートを休息時の肘の高さ+100mmの高さに設定した。
- ② 車いすを両手こぎする人で、トランスファーボードを利用して、部分介助で座位移乗をするという。後輪径を 22 インチにして、後輪軸位置が前と後ろどちらかを選べる車いすだったので、後方に設定した。
- ③ リフトで移乗するというので、レッグサポートやアームサポートは脱着できない車いすを選んだ。
- ④ 軽い介助で立位移乗するという。車いす座面上でプッシュアップが可能である。座面高さを立ち上がらせやすいように高めに設定し、レッグサポートが脱着できる車いすにした。
- ⑤ スライディングシートを利用して座位移乗（全介助）するという。座面角度を平ら（前後差なし）に設定した。

【設問 17】 クッション

車いすクッションに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 座圧を小さくするためには、適切な弾性要素と粘性要素を併せ持つか、あるいは弾性要素の強い素材と粘性要素の強い素材を組み合わせたクッションを利用するとよい。
- ② 体重 55kg の男性で、褥瘡のリスクが若干あるという。厚さ 7cm の低反発ウレタンだけのクッションを勧めた。
- ③ 車いすの座のクッションの役割には座圧を小さくすることとともに、姿勢を維持・修正する役割がある。その一つが座骨の前滑りを止めるアンカー機能であり、もう一つが体幹の側方への傾きを防止するサイドサポート機能である。
- ④ エアセルタイプのクッションは座圧の分散性能が高い。しかし、すべてのセルがつながっているタイプでは、一度姿勢が左右に傾くと修正するのが難しくなるという特徴を有する。一般に褥瘡のリスクが高い人は体幹バランスもよくないことが多いと予想されるので、エアセルタイプのクッションは褥瘡のリスクが高い人には利用しにくい。
- ⑤ 骨盤が後傾している座位姿勢の人の場合にはクッションのアンカー機能だけで座骨の前滑りを止めるのは難しい。

【設問 18】 姿勢調節型

姿勢調節型車いすに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 標準型車いすをどのように調節しても体幹バランスが悪く、左右に傾いてしまう人がいる。バックサポートのリクライニングと膝関節の屈伸（レッグエレベーション）が連動して動かせる車いすを勧めた。
- ② 姿勢調節型車いすは、シート角度（ティルト）、バックサポート角度（リクライニング）、膝関節角度（レッグエレベーション）などが随意に調節できるので、利用者一人一人の身体機能に応じて適切にこれらの角度を調節して利用することができる。介助者が適切な姿勢をその都度調節することは難しいので、専門家に依頼して最適な角度を決めたら、変更しないようにするか、この角度を記録することをした方がよい。
- ③ リクライニング、ティルト、レッグエレベーション、ヘッドサポート調節が可能な車いすを利用して、比較的起きている姿勢から比較的安楽な寝ている姿勢に変更する場合には、まずリクライニング機能でバックサポートを倒し、ついでティルト機能でシート角度を大きくし、レッグエレベーション機能で足を上げて最後にヘッドサポートの調節をする。
- ④ 姿勢調節機能付き車いすを利用するような人は座位移乗の可能性はなく、持ち上げるか強引な立位をとらせて移乗することになるから、原則リフトを利用すべきである。
- ⑤ リフトによって姿勢調節機能付き車いすに移乗するときは、あらかじめシート角度、バックサポート角度は本人が座位をとったときの最適な角度に設定しておく。

【設問 19】 駆動方法

車いすの駆動方法に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 両手両足こぎをする場合には、座面高さはクッションを利用した状態で、一般的に踵が床にしっかり着く高さ以下に、後輪駆動軸位置は前方に、バックサポート角度は90度近辺に設定する。
- ② 両手こぎをする場合には、後輪径は大きい方がこぎやすい。したがって、20,22,24インチの車いすの中では24インチの車いすを基本的を選択する。
- ③ 自繰（自走）・介助にかかわらず、車いすを駆動しやすくする要因のひとつにフレームの剛性がある。剛性は乗り心地とも関連し、剛性が低い方が駆動しやすく、乗り心地もよい。
- ④ 両手こぎをする人の場合には、車軸につけたドラム式の介助用ブレーキは多くの車いすにおいて、ない方がこぎやすい。
- ⑤ 両手こぎをする高齢者に車いす駆動方法を教える場合には、だ走（慣性によって何もしなくとも走行している状態）が入るような大きなストロークでこぐように教える。

【設問 20】 電動車いす－1

電動車いすに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。)

- ① 四輪のバーハンドル型電動車いすが歩道のある道路を走行する場合には、左側車道を走行しなければならない。
- ② ジョイスティックタイプの電動車いすが歩道のある道路を走行する場合には、歩道を走行することができる。
- ③ 四輪のバーハンドル型電動車いすもジョイスティックタイプの電動車いすも道路交通法上は軽車輪に相当し、概ね自転車と同程度以下の速度で走行することが義務づけられている。
- ④ 四輪のバーハンドル型の電動車いすとジョイスティックタイプの電動車いすとの相違のひとつは、後者がジョイスティック操作によって後進も可能であるのに対して、前者は後進する場合にはクラッチをはずして手押しで後進しなければならない、原則前進のみが電動化されていることである。
- ⑤ 手動車いすを電動化した簡易型電動車いすは、車いすの剛性が低いため、最高速度は概ね4.5km/h以下に設定されている。

【設問 2 1】 電動車いす－2

電動車いすに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（各1点）

- ① ジョイスティックタイプの電動車いすは上肢機能に障害があり、手関節より末梢の機能しか車いす制御に利用できないような人が適応である。
- ② 四輪のバーハンドル型の電動車いすは、いわば自転車代わりに利用するものであり、ある程度の距離は歩くことができる人が利用する。したがって、介護保険の給付対象にはならない。
- ③ 手動車いすを電動化した簡易型のジョイスティックタイプの電動車いすは屋内でのみ利用するものであり、四輪のバーハンドル型電動車いすは屋外使用に限定される。
- ④ 電動車いすで一般道路を走行する場合、酒気帯び運転は道路交通法違反に相当する。
- ⑤ 電動車いす適応の身体障害者手帳を有している高齢者の場合、電動車いすは介護保険ではなく、障害者自立支援法によって給付される。

4. 歩行補助用具

【設問 2 2】 杖類

杖類に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① 杖にはT字杖、ロフトランドクラッチ、多脚杖、松葉杖などがあるが、T字杖を除いたこれらの杖類は基本的に医療保険から給付されるべきものであり、介護保険では医療給付ができない場合の例外的な措置である。
- ② T字杖、ロフトランドクラッチ、多脚杖などの長さは、基本的に同じ基準で合わせるが、床面から尺骨骨頭（茎状突起）までの距離、あるいは床面から大転子までの距離に合わせるとよいとよくいわれる。この二つの距離は違いがないから、いずれで合わせても同じ長さになる。
- ③ 杖類の長さには誰にでも適応可能な長さの決め方はない。尺骨骨頭までの距離、大転子までの距離など、ある程度の基準となる長さは予測できるが、詳細は実際の歩容を見て、身体機能や生活実態のあり方に応じて決めることになる。
- ④ 上述した杖類は、身体機能の程度に応じて使用し、身体機能の障害が軽い順に、1) T字杖、2) ロフトランドクラッチ、3) 多脚杖、となり、松葉杖は両脚とも免荷したいあるいは支持ができないときなどに利用される。
- ⑤ 杖類は健側ではなく、患側に着きながら歩行した方が安定し、患側下肢の負担を軽減できる。

【設問 2 3】 歩行器

歩行器類に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各 1 点)

- ① 歩行器類は杖類では歩行が不安定になった人が使うものであり、杖類の適応よりはより身体機能が低下した人に適応するが、歩行器類は屋内使用を原則とする。
- ② 歩行器には、持ち上げて前へ振り出す固定型歩行器と、左右のフレームを交互に前に出す交互型歩行器がある。歩くときには、固定型歩行器では、歩行器を前に出したあと安定させた状態で、患足、健足の順に足を出し、交互型歩行器では前に出すフレームと同じ側の足を同時に前に出す。
- ③ 歩き方を学習するという点では固定型歩行器の方が早期に獲得しやすいといわれる。このため、固定型歩行器は持ち上げなければならないという欠点を軽減するために、前輪に車輪をつけて滑らせることができる歩行器が利用されることがある。
- ④ 歩行器類のフレーム（取っ手）の高さは、直立して腕を伸ばしたときの高さではなく、歩行時に、若干体幹を前傾させ、足がフレーム基底面内に歩行周期の半分程度入るような高さに調節する。
- ⑤ 四脚それぞれに車輪がついているタイプの歩行器がある。この歩行器では後ろ側 2 脚は荷重をかけるとストッパーが働く構造になっていることが多い。

【設問 2 4】 歩行車－1

歩行車に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選りなさい。(各1点)

- ① 歩行車には、フレームに肘をのせて歩行するタイプと、肘を伸ばして取っ手をつかんで歩行するタイプがある。前者は主として訓練の過程で使われ、車輪の径も小さいものが多く、基底面も大きいので、段差のある、廊下の狭い一般家庭では使いにくいことが多い。
- ② 肘を伸ばして使用するタイプは多くは座るためのいすがついており、いす付き歩行車とも呼ばれる。この歩行車において、重心位置を基底面内に入れるためには、座面が歩行の邪魔にならないように跳ね上げられるか、歩行の邪魔にならない程度に座面奥行きが短いことが望まれる。
- ③ いす付き歩行車において、体幹を前傾させて歩行すると、重心位置が基底面内からはずれやすい。このような場合には、取っ手高さを調節し、可能な限り体幹を起こして歩行するように教える。
- ④ いす付き歩行車は、ショッピングカートやシルバーカー（バーハンドル型歩行補助用具）と比較して車輪径が大きいので、例えば廊下と和室の間のような、多少の段差は乗り越えることができ、このため屋内で使用することも可能である。
- ⑤ いす付き歩行車は一般的な廊下（有効幅員 780mm 程度）では回転することができないので、屋内使用はできないことが多い。

【設問 2 5】 歩行車－2

歩行車に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① いす付き歩行車とバーハンドル型のシルバーカーとの相違はいろいろあるが、速度を自転車のように自在に調整できるブレーキが前者にはあるのに対して、後者ではオンオフ的なブレーキになってしまうことが多いことや、駐車ブレーキの効果が後者では前者と比較して緩いことが大きな相違である。
- ② バーハンドル型のシルバーカーは歩行時姿勢が前傾してしまい、体幹を起こした歩行はできない。一方、高齢者は腰が曲がった人が多いので、このような腰が曲がった人にとってはいす付き歩行車は使いにくく、多くがバーハンドル型のシルバーカーの適応となる。
- ③ 歩行車の車輪径が小さいと、駐車ブレーキをかけたとき、車輪はロックされても車輪と床との間で滑りが生じ、危険である。駐車ブレーキを確実に利かせたいときは、車輪径が大きな歩行補助用具を選んだ方がよい。
- ④ ある利用者がいす付き歩行車を利用する場面を観察していたら、手で歩行車を前に押してしまうため、足の運びよりも歩行車の動きの方が早く、危険である。ブレーキ操作をするように教えたが、上手にブレーキを操作できない。このような人にとっては歩行車は不適応であり、利用できない。
- ⑤ いす付き歩行車では座るときにはその場で身体を180度回転させなければならず、バーハンドル型シルバーカーでは、いすまで歩行して回転せずに座ることができる。したがって、歩行能力が低下してきた人にとってはバーハンドル型のシルバーカーの方が適応である。

5. 移乗

【設問26】 立位移乗

立位移乗に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 自分で立ち上がることがだんだん楽ではなくなってきた人を介助する場合には、本人の足の間に介助者の足を入れ、脇の下に手を入れて身体を密着させ、上に持ち上げるような介助はしてはならない。
- ② 何とか立ち上がれるが、楽に立ち上がりたい人の場合には、ベッドの昇降機能を上手に利用する。端座位では腰を少し浅めに座り、踵が浮いて、つま先が床に着く程度までベッドの高さを上げて、立ち上がるとよい。
- ③ 自分で立ち上がることができる人の場合には必ず立位移乗にした方がよい。座位移乗は本人が楽をしてしまうから不適応である。
- ④ 片まひの人がベッドと車いすの間を立位で自立移乗する場合には、健側へ移乗することの方が容易で安全なので、右片まひの人の場合には端座位になったとき、車いすが必ず左側に来るように配置する。
- ⑤ 自立ではしっかりした立位はとれないが、腰を浮かせることはでき、ベッド用グリップがあれば若干足を回転させられる人がいる。ベッドから車いすへ一人で移乗することは難しい。このような場合には、無理に立位はとらせず、車いすのアームサポートをはずして、腰を浮かせた状態で、介助者が後ろから誘導するような方法がよい。

【設問 27】 座位移乗－1

座位移乗に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① トランスファーボードを利用するときには、利用者は進行方向に体重を傾け、少し後ろ（背中）側に体重をかけるようにすると、ボード上を移動しやすい。
- ② トランスファーボードにしろ、スライディングシートにしろ、座位で移乗する場合には移乗する人の足は床にしっかり着地していた方が移動しやすい。したがって、ベッド端座位になったとき、足裏が浮いている場合には、ベッドを下げて足が少しでも床に着くようにベッド高さを調節する。
- ③ トランスファーボードやスライディングシートを利用して、昇降機能を有するベッドから車いすやポータブルトイレへの介助移乗が可能な人は、車いすからトイレ座面やベッドからシャワーキャリーへの移乗も可能である。
- ④ ベッドとポータブルトイレの間に隙間があると、ベッドからポータブルトイレへはスライディングシートでは移乗できない。隙間を2cm程度以下にする必要がある。
- ⑤ 座位移乗をしようと思ったら、ベッドがキャスター付きであった。ブレーキロックが2脚だけだったので、4脚すべてがロックできるタイプに変更した。

【設問 28】 座位移乗－2

座位移乗に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（各1点）

- ① ベッドと車いす間の移乗にトランスファーボードを利用する場合には、後輪が大きな自乗用車いすは不向きである。後輪が座面より低くなる介助用車いすが適応である。
- ② トランスファーボードを利用するときは滑りやすいので、利用者が自分で身体を動かそうとするよりは、すべてを介助者が行った方が安全である。
- ③ 座位移動（いざる）ができる人が利用するトランスファーボードは移乗先との溝を埋め、滑りをよくすることが目的だから400～450mm程度の長さがあれば十分である。
- ④ トランスファーボードをお尻の下に敷き込むときには、進行方向の逆側に身体を傾け、可能な限り多くのお尻がボードに乗るように差し込む。お尻がボードに乗る面積が少ないと、滑りにくい。
- ⑤ 車いすから自動車座席へ移乗する場合には、座面間に高低差があり、一般的にはこれを調節できないことから、座位移乗することは容易なことではない。しかし、利用者の上肢機能や体幹バランスの機能によっては、長い目のトランスファーボードと、さらにお尻の下に敷く補助用具の利用、二人の介助者などの条件を整えば、滑らせて移乗することが可能となる。

【設問29】 リフトー1

リフトに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。)

- ① ベッドと車いす、トイレでリフトを利用したい。ベッドからトイレ便器まで床が平らである。床走行式リフトを利用して、ベッドで吊り上げて、トイレまで移動して着座させると、1台のリフトで、ベッドと車いす、トイレの二つの場面で利用することができる。
- ② ベッド固定型リフトはその名称の通り、すべての機種がベッドにリフトを固定し、ベッドの重量を利用して人を吊り上げたときのリフトの安定を図っている。
- ③ ベッド固定型リフトの中には駆動機やハンガーなどを持ち運んで別の場所に設置したマストに固定して利用できるものがある。一台で複数の場所で利用できる。
- ④ 浴室に設置して利用するリフトは浴室の大きさや構造が個々に異なり、浴室への固定工事などが必要になるから、介護保険は利用できない。
- ⑤ レール走行式リフトには線レール式と面レール式がある。前者はやぐらを組んで1本のレールを支持しているが、後者は2本のレールを天井に固定し、このレールの間を別の1本のレールが移動するような構造になっている。したがって、天井に固定した2本のレールで囲まれる面内を自由に移動できる。

【設問30】 リフトー2

リフトの使い方に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 車いすに着座させるときには、骨盤をバックサポートに平行になるように、また腰が深く座れるようにしなければならない。このためには、車いすをキャスター上げて着座させる方法がある。キャスター上げをする場合には車いすのブレーキがしっかりかかっていることを確認することが大切である。
- ② リフトで吊り上げたときは、お尻が浮き上がると同時に介助者は利用者の身体を抱くことが大切である。このことによって利用者に安心感を与えることができる。車いすからベッドへ移乗するときには、なるべく介助者はベッドの上に上がり、ベッドに着床するまで一緒に付き添うことが大切である。
- ③ レール走行式リフト線レールタイプにおいても、ベッド固定型リフトにおいても、ベッドから車いすに移乗するときには、車いすはベッドと平行の向きにおく。
- ④ 車いすから吊り上げるときには、安全のため車いすのブレーキはかけておく。
- ⑤ レール走行式リフトを利用して、ベッドではなく、床から吊り上げたいときには、ポータブルタイプでは吊り上げることができない。

【設問 3 1】 吊具－1

吊具に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。）

- ① トイレ用吊具（ハイジーンとも表記されることがある）は車いす上で脱着できる。
- ② トイレ用吊具は、臀部が大きくあいているので、股関節伸展筋力が十分にあるか、股関節が拘縮気味であるなど硬くないと、利用できない。したがって、一般的には ALS（筋萎縮性側索硬化症）や PMD（進行性筋ジストロフィー）などには利用できないことが多い。
- ③ シート型吊具は身体全体を覆うので、吊り上げられて快適であり、股関節伸展筋力がなくとも利用できるのも、もっともよく利用される吊具のひとつであり、リクライニング車いすなどへ移乗したときも簡単に脱着することができる。
- ④ 脚分離型ハイバック吊具の中で、4点で吊り上げるタイプの吊具は、頭の支持ができる人でも利用することがある。
- ⑤ 頭の支持ができない人がローバックタイプの吊具を使うときにはヘッド（ネック）サポートが必要になるが、このヘッドサポートを利用するとハイバックと比較して、頭の支持性が高くなる。

【設問 3 2】 吊具－ 2

吊具の使い方に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各 1 点)

- ① 脚分離型のローバック吊具では一般的に上肢を吊具の内側にくるむように吊る。上肢を吊具の外に出して吊り上げた方が開放感があるが、吊具の形状と大きさによっては腋下进行を圧迫される。
- ② シャワーキャリーで、座面と台車部分を切り離すことができ、座面だけを吊り上げて浴槽の中に入れられるタイプがある。浴槽の中で姿勢を維持しやすく、簡易に使えることから入浴介助ではよく使用される。特に普通のシャワーチェアでは姿勢が崩れてしまうような体幹バランスが悪い人でも安定して座れるので、リフトの利用者に向いている。
- ③ ベッドから吊り上げて車いすに移乗する場合には、吊具の背中心と利用者の脊椎（背の中心）とを合わせる必要がある。これが合っていないと、吊り上げたとき体幹が傾くとともに、車いすに着座したとき骨盤が左右で高さが異なってしまうばかりでなく、前後に傾いてしまう。
- ④ 多くの吊具が吊り上げたときの姿勢を調節できる。この姿勢を調節するためには体幹側の吊具と足側の吊具の長さを変えるが、体幹側の長さを長く（足側の長さを短く）すると、吊り上げたときの姿勢は起きてくる。したがって、車いすへ着座したとき、腰が深くなりやすい。
- ⑤ リフトで吊り上げたとき、利用者は両肩周辺に圧迫感を感じやすい。このため、介助者は吊り上げたらずい肩を前に押し出したり、上腕部を前に引き出すなど、いわゆる「肩抜き」といわれる介助動作を行う。同様に、大腿部に関しても圧迫を感じることも多く、特にシート型吊具では、吊り上げ初期に股関節を屈曲させるような「足抜き」介助をした方がよい。

6. 入浴補助用具

【設問 3 3】 シャワーチェア

シャワーチェア・シャワーキャリーに関する次の記述の内、正しいものに○，間違っているものに × をそれぞれ選びなさい。（各 1 点）

- ① シャワーチェアもシャワーキャリーも，ともに介護保険が利用できる．シャワーチェアは購入品目であり，シャワーキャリーは車いすと同様レンタル用品である．
- ② 安定して座位が保てる人であったが，バックレストとアームレストがあったほうがより安定するだろうし，いざというとき役立つと考えて，これらがついているシャワーチェアを勧めた．
- ③ シャワーチェアを納入した客から，座ったときにがたがたして四脚が同時に床に着かないというクレームがあった．訪問して確認したら，脚の長さ調節の問題ではなく，客のいうとおりだったので，ひとまずクレームとして商品を引き取った．
- ④ お尻が洗いやすいように，座面の真ん中に溝が着いているシャワーチェアがある．ある片まひの利用者が健側のお尻が洗いにくいというので，このタイプのシャワーチェアを勧めた．
- ⑤ 自宅の浴室でシャワーだけしたいという．浴室までの動線を確認したら，動線上には 30mm の段差があり，80cm 幅の廊下が浴室の前で 90 度に曲がっていて，車いすでは曲がりきれない．小さな四輪キャスターのシャワーキャリーなら曲がれるので，これを勧めた．

【設問 3 4】 浴槽周辺の手すり

浴槽周辺で利用する手すりに関する次の記述の内、正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選べない。（すべて正解して5点，1問でも間違えると0点。）

- ① 浴槽の底と洗い場床との高低差が100mmである。浴槽の縁を立位で跨ぎ越すという。跨ぎ方は正面跨ぎ（浴槽の縁に正対して跨ぐ）ではなく，側方跨ぎ（浴槽の縁と同じ方向に立つ）である。浴室の壁に洗い場から浴槽まで，1本の横手すりを設置した。
- ② 上と同じ条件で，壁に手すりを設置できない。浴槽の縁に固定する手すりを利用して，側方跨ぎで浴槽に入ることを勧めた。
- ③ 浴槽を跨ぎ越すときに浴槽の縁に取り付ける手すりが欲しいという。家族と共通に利用する浴槽なので，手すりをつけると浴槽のふたができなくなる。壁に固定する手すりを勧めた。
- ④ 浴槽を跨ぎ越すにも縁に固定する手すりが必要で，浴槽内での安定を維持するためにも縁に固定する手すりが必要だという。動作を確認したら，これらの手すりの位置が重複してしまった。一方しか設置できないから，本人・家族にいずれの動作を優先するか，決めるよう依頼した。設置できない方の手すりに関しては，動作を変更するか，別な対策がないか，考えることにした。
- ⑤ 浴槽から立ち上がるときに壁に取り付けたL型手すりを利用するという。縦手すりの位置を指示されたが，ユニットバスだったので指示された位置には固定できそうにない。前後50mmのいずれかなら固定できそうだったので，遠方にずらした位置に固定した。

【設問 3 5】 環境と動作

75才の片まひの男性（身長165cm）が72才の奥さんの介助で入浴する。洗い場から浴槽の縁までの高さが360mmで，脱衣場と洗い場に100mmの段差がある。浴槽の深さは600mmである。屋内は軽い介助で歩行でき，いすからの立ち座りも座面高さが適切なら軽い介助で可能だという。

以下の記述で正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選べない。（各1点）

- ① 洗い場と脱衣場の段差を越えるのが怖いので，すのこを利用して段差を解消した。
- ② 洗い場と脱衣場の両方に，出入り口近辺に縦手すりを設置した。
- ③ 座面高さ360mmのバックレストもアームレストもない座面が平らなシャワーチェアを準備し，これを浴槽の隣に置いて，座って浴槽を越えるようにした。
- ④ 浴槽から出るときに起きあがりにくいと言う。浴槽に入るときも少し深すぎるので台が欲しいという。浴槽内では台に座って入れば肩までお湯に浸からないが，立ち上がりが容易になるので，入るときも台も兼ねて高さが120mm，縦と横が285mm×325mmの浴槽内いすを勧めた。
- ⑤ 浴槽内から立ち上がる時，前方に手すりが欲しいという。浴室のレイアウト上健側から出るようになるので，浴槽の縁に固定するタイプの手すりを勧めた。

【設問36】 バスブースターとリフト

浴槽内昇降機とリフトに関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選べ。 (すべて正解して5点、1問でも間違えると0点。)

- ① 浴槽の深さが600mm、幅(内寸)が680mm、長さ(内寸)が800mmの浴槽で、脳血管障害の男性が浴槽から出られないという。この男性は右片まひで、まひ側足関節に背屈制限があり、まひ側膝関節が伸展位から45度程度までしか屈曲できないという。座位でお尻を横方向に移動させることはできる。浴槽内昇降機を勧めた。
- ② 自宅(借家)の浴室でのリフトを利用した(介護保険利用)入浴を希望している四肢まひの男性がいた。ユニットバスで、浴室の改修はできないという。浴室用リフトはユニットバスでは工事抜きでは固定できないので、断念してもらった。
- ③ 脱衣場までの動線はシャワーキャリーで問題ないが、脱衣場と洗い場の間に100mmの段差がある。在来工法の浴室だったので、改修もできなくはないが、費用がかさむ。リフトのレンタルだけで可能か、聞かれたが、段差を解消しなければ無理だと答えた。
- ④ シャワーキャリーの座面だけをリフトで吊り上げて浴槽に入れる、四肢まひの人だが、このシャワーキャリーへの移乗が問題になった。ベッドにあるリフトを利用して、シート型吊具でベッドからシャワーキャリーに移乗し、浴室へ移動して、座面部分だけを吊り上げて浴槽に入る案を提案した。シート型吊具が邪魔になるし、吊具が重なるということでこの案は採用されなかった。
- ⑤ ベッド上で下半身を脱衣し、シャワーキャリーに移乗して脱衣室まで移動し、リフトを利用して入浴するという。ベッドと車いす間の移乗はトランスファーボードを利用した介助移乗である。ベッドからシャワーキャリーへの移乗も同様にトランスファーボードを利用することにした。

7. 排泄

【設問 3 7】 ポータブルトイレ

ポータブルトイレを選択するとき、条件として考慮した方がよい点は下記の通りである。

正しい記述に○、間違っている記述に × をそれぞれ選びなさい。（各 1 点）

- ① ベッドサイドでポータブルトイレを利用する。車いすも利用している人なので、ポータブルトイレは利用時に移動しなければならない。重量が軽いポータブルトイレを勧めた。
- ② 座位でスライディングシートを利用して、ポータブルトイレへ介助で移乗するという。座位移乗のときはポータブルトイレが移動しては危険なので、重く、安定しているポータブルトイレを勧めた。
- ③ 軽い失禁をしてしまう女性の場合、スライディングシートを利用した座位移乗は不適応である。
- ④ 家具調のポータブルトイレを利用したいという。理由を聞くと、使用しないときにテレビを見るときなどのいすとして利用したいという。利用したいポータブルトイレの座面（便座ではない）が 1 枚で跳ね上げるタイプだったので、いすはいすで別に準備することを勧めた。
- ⑤ ポータブルトイレの便座高さは立ち上がりやすさを考えて、踵が若干浮き上がるかどうか位の高さに調節することが一般的である。

【設問 3 8】 ポータブルトイレの選択

ポータブルトイレを選択するとき、条件として考慮した方がよい点は下記の通りである。

正しい記述に○、間違っている記述に × をそれぞれ選びなさい。（すべて正解して 5 点、1 問でも間違えると 0 点。）

- ① 立位移乗するときはアームレストが長い方が適している。
- ② 便座高さは調節できなければならないし、前後の高さを別々に調節して、座面角度をつけられることが必要である。
- ③ バックレストは脱着できることが必要。
- ④ 脚基底面の面積が座の面積より広ければ広いほどよい。
- ⑤ 後脚の後ろにキャスターがついているタイプは、運搬の容易さを考慮したものであり、運搬するときはアームレストの前よりを持ち上げて移動させる。このため、アームレストは長い方が運搬させやすいと言える。

【設問 39】 便器

便器に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 股関節に疾患があり、股関節を伸展位で便座に座りたいという。便座の高さを高くするために、簡単には補高便座を使用する。便器についていた洗浄機能もそのまま使えるから家族との共用にも問題は少ない。
- ② 便座への立ち座りが困難になってきたら、昇降便座を利用する。これは電動で便座が昇降するものだが、昇降軌跡には垂直昇降と円弧昇降がある。ほとんどの場合円弧昇降が適切である。
- ③ 昇降便座には便器に固定するタイプと床に固定するタイプがある。介護保険では便器に固定するタイプしか給付対象とならない。
- ④ トイレ便座から立ち上がるときや座っているときの姿勢の維持にアームレストが必要な人がある。この場合のアームレストは手すりとなり、すべてレンタルではなく、住宅改修が適用される。
- ⑤ ポータブルトイレで手すりが必要な場合は住宅に固定しないので、レンタル対象である。

【設問 40】 尿器

各種尿器に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×をそれぞれ選びなさい。(各1点)

- ① 尿器（しびん）は男性用と女性用とに分かれている
- ② 陰部に採尿器をあて、チューブを介して尿をタンクに溜める集尿器がある。採尿部からタンクまで必ずチューブが下がっていることが大切であり、基本的にはベッドを利用している人に向いていて、畳に布団に寝ている人には利用できない。
- ③ 排尿を検知し、ポンプで尿を吸引するタイプの集尿器がある。採尿器の部分がパッドになっているタイプも市販されている。本体の購入に関して介護保険が利用できるが、センサーがついたパッドの購入は介護保険が利用できない。
- ④ 尿意があって車いすを利用している人（男性）がいる。ポータブルトイレでは便座の内径が小さく、どうしても汚してしまうという。車いす上で腰を前に出して座る（いわゆるずっこけ姿勢）ことができるので、しびんを利用することを勧めた。
- ⑤ 男性用集尿器のひとつである、コンドームタイプの集尿器は、主として機能性尿失禁の人が適応である。
- ⑥ 尿器（しびん）は腹圧性尿失禁の人には不適応である。
- ⑦ ポンプで吸引するタイプの特殊尿器は溢流性尿失禁の人に適応である。

【設問 4 1】 おむつ・パッド類

おむつ・パッド類に関する次の記述の内、正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選べなさい。（各 1 点）

- ① 歩くことができ、勝手に散歩に出かけてしまう人（女性）がいる。時間誘導で排尿しているが、しばしば失禁してしまう。パンツタイプのおむつが適していることが多い。
- ② 女性で腹圧性尿失禁の場合にはパッドが適応であることが多い。失禁量を計測して、パッドの吸収量を決めるとよい。
- ③ 男性で、少量の尿失禁をする。軽失禁パンツとパッドの組み合わせを提案した。
- ④ 立位がとれない車いす利用者（女性）で、尿意がなく、失禁する。フラットタイプのおむつとパッドの併用、アウターとしてカバーを勧めた。
- ⑤ 男性の認知症の人で車いす利用者である。数 m なら歩いてしまうこともある。時間誘導でトイレで排尿するが、しばしば尿失禁をするという。コンドームタイプの集尿器を勧めた。
- ⑥ 股関節が屈曲拘縮し、内転している。おむつはフラットタイプやパンツタイプが使用できず、布タイプにした。
- ⑦ 失禁量が 50cc 程度の女性だったので、生理用パッドを使用するよう勧めた。
- ⑧ パッドは切迫性尿失禁の人に適応である。

8. その他

【設問 4 2】 衣類

車いす上でしびんで採尿する男性のズボンと下着の改修に関して適切なものに○を、不適切なものに×をそれぞれ選べなさい。（採尿のしやすさのみを考慮する。）（各 1 点）

- ① ズボンの骨盤部分の横をファスナーあきにする。
- ② ズボンの前のファスナーを座面まで長くする。
- ③ ズボンの股下の両内側をファスナーあきにする。
- ④ ズボンの下腿部から大腿部までの内側横をファスナーにする。
- ⑤ ズボンのウェストをゴムにする。

【設問 4 3】 靴

高齢者の靴に関する次の記述の内、正しいものに○，間違っているものに×をそれぞれ選りなさい。（すべて正解して5点，1問でも間違えると0点。）

- ① 片まひで，短下肢装具（金属支柱タイプ）を装着している．靴のサイズが左右異なるので，左右それぞれ合わせて2足購入し，片側だけを使用することを勧めた．
- ② 四肢まひで車いすを利用している．立位はとれない．屋内で車いすを使用しているときに靴が欲しいという．室内履きの靴を勧めた．
- ③ 足こぎの車いすを利用している．床が滑りやすく，こぎにくいという．靴底に摩擦係数の大きな素材を貼り付けた靴が市販されているのでそれを購入するよう勧めた．
- ④ 介助で歩行するが，床が滑りやすく不安だという．市販されている靴の中で，靴底の摩擦係数が一番大きな靴を勧めた．
- ⑤ 転倒の危険があるので介助で歩行している人がいる．家の中には畳の部屋とフローリングの部屋があり，フローリングの床では滑りやすいのでいわゆる介護靴を履いている．靴を履いたり，脱いだりしなければならないという．かがむのが大変なので，踵を踏みつぶして，いわばスリッパのようにして履くことを勧めた．

